

徳島大貢献 ALS 新薬

国内3例目 月内にも承認



梶特任教授



和泉教授

は、平均余命を約90日延長する内服薬など2種類で、認められれば国内3例目となる。(26面に関連記事)

治療調整医師を務めた徳島大の和泉唯信教授(老年神経学)らによると、ロゼパラミンは発症から1年以内に使用すると、600日以上以上の生存期間の延長と進行抑制が期待できる。患者

の生活質(QOL)を保つことにもつながる。早ければ今月中に承認され、その後、製薬大手エーザイが製造を始める。年内には保険適用で利用できるようになる見込み。エーザイは治験データの使用权を持つ徳島大と独占的使用に関する契約を結んでいる。主成分メチルコバラミン



筋萎縮性側索硬化症 脳

からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵される難治性の神経疾患で、発症メカニズムが明らかになっていない国の指定難病。発症すると全身の筋力が低下し、やがて呼吸困難に陥る。3〜5年で、人工呼吸器を装着するか死亡するケースが多い。1年

間の有病率は人口10万人当たり5〜7人とされ、国内の患者数は約1万人、徳島県は約80人。100種類以上の薬剤が治験されているのは、平均寿命を約90日延長する内服薬「リルゾール」と、症状の進行を抑制する点滴剤「エダラボン」2種類のみ。

徳島大大学院医歯薬学研究所の梶龍児特任教授(臨床神経学)らの研究グループが、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の進行を遅らせる効果が期待できるとして医師主導で治験をしていた新薬「ロゼパラミン」が、厚生労働省の専門部会で新たな治療薬として承認された。近く正式に承認される予定。現在承認されているの

は活性型ビタミンB12の一種。2001年から05年にかけて梶特任教授らが行った徳島大学病院での臨床研究で、ALS患者の生存期間を延ばす可能性があると分かった。徳大病院は17年11月から主幹病院として国内24施設の協力を得て、医師主導で発症1年以内の患者を対象に治験を実施。16週間の治療を行い、進行を抑制する効果を確認した。06〜14年には、徳大病院の臨床研究の結果を受け、エーザイが発症後3年以内のALS患者を対象に治験を実施。徳大病院も参加施設として協力し、発症から1年以内の被験者に限られた。

和泉教授は「多くの協力者を得て長い年月がかかったがようやく薬として使用できる。患者には薬の効果を実感してほしい」と話した。(佐藤聡美)